

# 功利主義と倫理

## Concept of publicize Society

Kouichi Shibao

芝尾紘一

E-mail: k.shibao37@gmail.com

TEL:03/3260/0904

### Abstract

#### Utilitarianism & ethics

The goal of utilitarians, “The greatest happiness of the greatest number”, is seemed to be a right and easy to understand politically and economically. However, modern economic theory denied the utilitarianism due to the premises of the rational and egoistic economic man and difficulty of measuring happiness. Pareto-optimality proved to produce infinite number of solutions, which has led to the useless economic theorem.

### 要旨

最大多数の最大幸福と言う功利主義の目標は、分かり易く政治的にも公平で多数の利益を尊重すると言うのも民衆主義とも相性がよく、公的な経済政策においても目標に相応しいように見える。しかし、近代経済学においては、これを主張する功利主義は否定されている。この理由は、自己利益を合理的に追求する経済人と言う近代経済学の想定と、科学的には幸福は計量出来ないし、集計できないからである。しかし、個人の既得利益を侵害しない範囲で他人の利益を増やしても良いと言うパレート最適の考え方では、無限に答えがある。このため経済理論の有効性が無くなりその解決の糸口を探す必要がある。

### 目次

- 1, はじめに
- 2, 功利主義とは何か
- 3, 最大多数とは誰を指すのか
- 4, 功利の負担配賦と効用分配
- 5, 功利主義と限界革命
- 6, 効用は測れるか
- 7, 現代政治・経済の状況ーリベラリズムの行方
- 8, 今後の方向

## <参考文献>

### 1、はじめに

#### 1.1 何故功利主義か

ベンタムの言った「最大多数の最大幸福」は政治の原理としては一見、揺ぎ無い不動の原理のように思われる。元首相も似た「最小不幸社会」を唱えたが、やはり最大化のほうが積極的で明るくなる。出来るだけ多くの人々が最も幸福になることを目標にするのは、民主主義は多数決で決定するのであり相性もよさそうだ。

しかし、現実には自由主義のルールズによって多数の為とは言え個人の自由、権利を阻害するとして否定されて以来、功利主義が政治や経済の原理として表面に出ることは無くなった。日本でブームになったマイケル・サンデルも5人に向けて暴走するトロリーの行方を切り替えて、一人を殺すことが出来ますかと尋ねて功利主義を否定した。

しかし、私的な金融企業の格付けで欧州各国の経済、政治が左右される不安定な時代である。過度にグローバルに依存し合い複雑に進化した金融市場に各国の庶民の生活が支配されている。私欲に走り金融恐慌を引き起こし世界を混乱に陥れた金融機関の責任を問うどころか、更に世界の人々の税金で救済しない限り世界経済が立ち行かない状況は人類の無能さの表れと言わざるを得ない。過度の複雑さを縮減して単純な世界にしないと解決できないかもしれない。この意味では、最大幸福原理は分かり易い。

しかも、工学や古典科学の世界では何事もポテンシャルの最大化に還元できることが分かっている。I.ブリゴジンの発見した散逸構造の自己組織化原理では、自然界では生物を含め全てのものが、エントロピーを最大化する様に振る舞い、その結果、細胞や遺伝子まで自生的に生成されることが判明している。既に、エントロピー経済学などが現れているが、一つの視点として一世界を動かす槌子の支点であるアルキメデスの点と考えてもよい。功利主義を改めて検討してみたい。

#### 1.2 何故倫理なのか

そこで、何故倫理なのかと言えば、まず、人間存続の為の価値、そして行動の選択の規範(ルール)である倫理を考えることによって、問題を我々が解決できるように単純化出来ないかと考えるからである。倫理は最終的な自分や人の生死の選択までを含んでいるので簡単な問題ではない。しかし、フクシマの原発災害でも明らかのように、より良く生きようとすれば倫理の問題は避けては通れない。逆に、倫理の問題を先に考えることによって、袋小路の問題解決の糸口を見出す可能性が無いかと考える。

例えば、「和をもって貴しとする」は聖徳太子が17条の憲法で説いたのであるが、この「無条件平和の尊重」とそのため「全員一致の合議ルール」はその後の日本の進路を大きく左右した。明治維新を平和革命にし国内の騒乱を避けることが出来たが、後世では国家としての意思決定の遅さ、効率の悪さから軍部に乗じる隙を与え世界大戦へと導いた。

実は八方美人で誰にでも善くしようと言うのは、日本だけでなく、それが結果的に有効な対策であり得ず、そのため本来、果たすべき理論の役割を果たし得なかった例がある。

そのような役割を果たし得なかった理論として功利主義を挙げたい。「最大多数の最大幸福」と言う誰もが政治的、倫理的に受け入れやすいような標語を掲げながら、効用を量ることが科学的にできないと言う理由で退けられた。

誰もが現在以上に悪くならないと言うパレート最適についてはパレート自身がその無効性に気付い

たが、効用比較の否定に基づいて、パレート最適を構成基準とする新厚生経済学が正統的な経済学の支配的なパラダイムとなった。しかし、その結果、利己主義的な解釈が経済理論で横行し、有効な経済制御の理論を創出出来ず、世界の庶民が被害を被る状態が続いている。この件については、本報告で記したい。

そして、N.ルーマンと T.ハーバーマスは、コミュニケーションが人間の生活、社会の中心であることは、一致した。が、N.ルーマンは人間の思考・判断力には限界があり、過剰な複雑さを縮減しない限り解決できないと考え、制度やシステムの必要性を説いた。しかし、T.パーソンズは、あくまでも人間間の討論、コミュニケーションによる間主観性に拘った。つまり、話し合いによる合意である。

しかし、間主観性の合意によっても真理には到達し得ない場合もあると、多様なパラダイムを認める存在志向的な多元主義を法哲学者の井上達夫は主張する。バタイユの非\_知のように、生の複雑さや豊かさは単一のパラダイムに収まりきれず、我々は常に「群盲象を撫でる」の状況にあることを認めることを要請する。存在志向とは、生命の存在の持続を要請する志向性で、プラグマティストであり脳学者で哲学者の W.J.フリーマンやスコラ哲学のトーマス・アクイナスの志向性と一致するのではないか。

## 2. 功利主義とは何か

### 2.1 ベンタム功利主義

最初に功利主義を提案したのは、ベンタムである。しかし、彼の提案した功利主義は、「最大多数の最大幸福」などから後世の我々が受け取るイメージとは必ずしも一致しない。ベンタムの言う功利主義 (Utilitarianism) は、個人が感じる苦痛を少なくし、快く感じる快楽を最大化することであったのである。快感と苦痛と言う人間の感覚に過度に依存するのは、今迄の直観的な倫理と対立は避けられなかった。快感や苦痛と言う感覚は、生物の進化の過程で獲得したもので、快感はそれが達成されると生存持続しやすく、又、苦痛はそれを避けた方が生存持続し易い働きであろう。しかし、人間社会が発達し複雑になるにつれ、このような本能にのみ従って生きて行けば、人々の間の抗争が増え、かえって生存が困難になると言うことは東西の宗教者、道徳者が指摘することである。このため、本能的な快や不快を超越することが、修行や成長の目標にされるのである。

従って、不快と感じるものを避け、快とを感じるものを最大化するという素朴な功利主義は継承者の J.S.ミルによって「太った豚よりも痩せたソクラテスがよい」と質的な感覚に修正された。

しかし、功利主義の主張にも問題がある。

### 2.2 功利主義の特質

功利主義の特徴は次のようなものと考えられている。

- (1) 帰結主義：動機や行為、ルール(規則)、制度の価値ではなく、その結果によって評価する。
- (2) 効用一元論：行為やルール、制度の正・不正をそれ等がもたらす結果によってのみ評価する。つまり、功利・社会全体の幸福への寄与によって測定し、最大の幸福(功利)を志向する。
- (3) 平等性：(4) 最高規範としての「最大幸福の原理」：通常の行為の選択は伝統、慣習のルール、法制度に従い、これらが矛盾した場合に功利主義に従って、幸福計算し最終的に審査、決定する。

(1)は、プラグマティックな立場から見れば、現実に効果を上げない限り評価されないのは当然であろう。

(2)はそのため、功利主義は最終的にはピグー等の厚生主義(welfarism)に結び付く。そして、今日でも問題にされる幸福度や、人間に享受すべき豊かさの問題につながる。しかし、社会全体の幸福や厚生への寄与度を何に考えるかについて、様々な深刻な異論が発生している。

- ・最大多数とは誰なのか。
- ・幸福とは効用とは何か。
- ・集計的効用の最大化の倫理的矛盾

隠された規範(ルール)・・・配賦と分配

- ・効用は個人間の比較は可能か？  
効用が測れるか？・・・基数性・・・ワルラス ロビンズは個人間

(3)はベンタムは功利主義の幸福計算において「誰でも一人として数え、誰も一人以上に数えてはならない」と主張した。逆に、自由主義の立場では実際に差を解消することは難しくとも、規範として個人の間には差を認めることは難しい。

(4)はJ.S.ミルによって主張され、ヘアの2層理論で定式化された。しかし、規範の最終的な選択の基準に功利主義を採用できるかは検討の余地がある。(2)で様々な疑念が功利主義にあり有効であるかは分からない。しかし、功利主義はその他のパラダイムと同様に、有効な適用分野があっても可笑しくない。

以下に問題になった(2)を中心に功利主義の問題点について考えたい。

### 3. 最大多数とは誰か

#### 3.1 ベンタムの言う最大多数

ベンタムの効用主義の意図は、権力を持つ施政者の恣意的な立法、行政に「最大多数の最大幸福」と言う原則を与えることで制約する改革であった。彼の原理の、現在の視点から見て問題であると考えられるのは、一つは最大多数の多数とは誰なのかとすることである。

ギリシャ時代の民主主義を最初に実現したとされるペリクレスだけでなく、ソクラテス、プラトン、アリストテレスにとって、市民には奴隷や女性は含まれない。ローマ時代も同じであった。つまり、当時の都市国家間の戦闘が有る時代は、その戦争に参加し得るかどうか、権利を主張できる市民の資格であったのである。同様に、ベンタムの時代は産業を担う手工業者や商人、将来のブルジョアジーが成長しつつあり、貴族や王等の権力に対し、権利を主張しつつあった時代であった。従って、「最大多数の最大幸福」は、実質的には、社会を変革するに役割が期待できる人々ー市民、萌芽期の産業資本の担い手であるブルジョワジーの最大幸福であり権利を意味していた。従って、後継者のJ・S・ミルが、代議士として選挙に選ばれた女性に選挙権を与える急進的な案を提案すると、反対され尊敬はされていたが次の選挙では落選している。つまり、社会に受け入れられた社会を担い変革していく可能性があるとして期待される人々の最大多数の幸福を意図したことになる。

つまり、ベンタムの意図は、本質的にはA.スミスの当時の国を運営する施政者層の恣意や意向、重商主義に任せず、「見えざる手」に任せれば、人間の利己主義によって社会は、当時勃興し始めていた産業家、市民に任せて自由放任すれば上手く行くと言う確信と同じである。当時の王侯、貴族の権力者の恣意的な権力からの自由と、権力を支えることになる根拠なき倫理、直観で感じることで発生するー従ってややもすれば、現状の権力構造を受容するー直観主義の倫理を否定し、「最大多数の最大幸福」の普遍的な原理に従うことを主張したのである。

J・S・ミルは生涯のほとんどの33年間を東インド会社の文書管理及び通信監査局長としてそのポストが廃止されるまでその職に留まった。ミルは功利主義を完成させたと言われるが、経済問題に功利主義が適用するのに、強く貢献したようには思われない。彼の「自由論」は、その後の民主主義の教科書のようなのだが、支配階級からの新興市民達の財産没収や肉体的束縛からの自由であった。

ベンタムやJ.S.ミルは、最大多数の最大幸福を功利主義のモットーとはしたが、心情的には兎も角、政治的には必ずしも、社会の全ての人の幸福を経済や法律を通じて実現を図るものではなかった。確かに、ベンタムは所得の効用逓減の視点から、高所得者に税金を増やすのに賛成したが、J.S.スミス

は反対した。つまり、当時、勃興しつつあった新興階級である経済人的市民の自由と振興を望む点では、A.スミスと同じ自由人であった。功利主義者が「最大多数」として活躍に期待していたのは、産業革命が始まり、その担い手である自由な経済人であった。後世に産業を興し、資産を持つブルジョアジーに成長する自由な市民達である。それは現代、新しい英雄としてステイブ・ジョブズを称賛し、期待するのと同じである。J.S.ミルは、功利主義者と言うよりも「自由論」の著者として喧伝されている。

### 3.2 産業革命後の最大多数とは

功利主義の経済への応用が始まり、「最大多数の最大幸福」の原理が現実にして言葉通りに、庶民生活に大きな影響を与える経済政策への適用が迫られたのは、産業革命が進展し爛熟期を迎え、都市に人口が集中し始め、産業資本が発展した時期である。

古典経済学のマーシャルが生まれた時代は、産業資本が発達し工場制機械工業が産業の中心となり、少年労働者が過酷な条件で工場で酷使された時代で、平均寿命はリバプールで 15 才だったと言う記録がある。従って、下層階級である労働者も含めて最大多数の最大幸福を考えざるを得ない時代になった訳である。A.スミスの労働価値説から効用価値への転換を行いマーシャルは、ロンドンの貧民窟を学生を連れて訪れ、悲惨な労働者の状況を改善するのが経済の目的だと激励した。功利主義者としても有名なシジウィック、古典派経済学の伝統を重視するピグーがの厚生経済学を提案した。

古典経済学の提案した厚生経済学は社会的効用を最大化しようとするもので、シジウィック以外は功利主義者とは言われないが、功利主義と同じである。功利主義の日本語への訳語としては、公益主義などが考えられた。ピグーの厚生第2原理は、所得再分配はそれが経済全体の生産を減少させないかぎり、経済的厚生を増大させるというものである。この原理は、所得の限界効用逓減の法則から導かれたもので、高所得者から低所得者への所得再分配は貧者により大きな効用をもたらすので、集計的効用、つまり、社会全体の効用は増加すると言うものである。但し、これは効用の基数性、つまり、効用の計量可能なことを前提にしている。効用の基数性については、その後、多くの反対が現れた。又、功利主義、特に集計的功利主義と関連の深い新古典主義経済が現れた。当時のワルラスやパレート等の限界革命の主役たちは、ジェボンズを除いて功利主義者であることを認めなかった。しかし、供給者と消費者の限界効用が等しいと言うことを自分の理論の前提としていたので、数理的には何等かの意味で供給者、消費者の効用を集計したものを最大化している。先ず、倫理的に問題がある功利の負担と分配の問題について検討し、ついで、効用の個人比較は可能かなどの新古典派経済学と功利主義の関係については後で検討する。

## 4. 功利の負担配賦と効用分配

### 4.1 集計的功利計算の倫理的欠陥

ピグーの厚生第2原理の効用計算は後で、様々な非難を浴び、パレート最適を採用した新厚生経済学に変えられた。その理由は効用が計量可能かどうかの問題だがそれ以外にも問題があった。初期のベンタムの功利主義の快樂を測定の尺度として使うことへの疑問は当然であるが、それ以外にも集計的効用＝総効用の極大化には倫理的に問題があった。

つまり、集計的な効用を最大化することだけが目標であれば、自由主義者が非難するような、個人の財産権を侵害することも生じる。また逆に、少数の人間の効用が非常に大きくなれば、多数者の効用が小さくなっても、それでも全体としての総効用は大きくなるのである。従って集計的な総効用が増えたとしても、必ずしも各個人は幸福になるとは限らない。「最大多数の最大幸福」は実際にそのまま実行しようとするには問題が多すぎた。

政府の裁定の原則として採用されても問題があり、「最大多数の最大幸福」を有用な厚生的規範とす

るためには効用をどのように個人の間で分配するかを先に問題にする。この問題は価値感の問題、従って倫理の問題である。

又、分配するということ自体に問題が生じるのかも知れない。政府による分配は、選挙民の憐憫の感情に逆らえない政治的な配慮は単なる困窮者への救済金となって漫然と生活費に替わるだけで真の個人の自立にはならない。ローマ市民が権利として無償でパン(衣食)とサーカス(娯楽)を求め始めた時、ローマの崩壊が始まったと言われる。憐憫は個人的な慈善行為によるべきで、政治や経済では A.スミスの共感(sympathy)やロールズの誰もがそうなる可能性を実感する「無知のベール」に留めるべきであろう。

従って、配分は負担の配賦と効用の分配を価値観、倫理に基づいて選択する必要があるのだ。このためには、絶対的な価値観、倫理は有り得ないので国民など関係者の間で、政治的に意思決定しておく必要がある。

#### 4.2 ロールズと功利主義

倫理的に負担の配賦と効用の分配について考えたのは、「正義論」で倫理的に功利主義に幕引きを命じたロールズである。ロールズは個人の自由を尊重しないとして功利主義を排した。功利主義自体に様々な問題点、曖昧さがあったことは事実である。

カントには「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理と見なされうるように行為せよ(自分の行動の原理が、いつこの誰にでもあてはまるような行動の原理だとできるように行動しなさい)」遠い格率がある。ロールズの正義論で主張した無知のベールは、カントの格率を置き換えた、一見すると客観的で科学風な装置に過ぎないのだが、1970年代の米国で大きく受け入れられた。彼は、これをベースにそれまでの倫理の中心であった直観主義と功利主義の代わりに、2つの原理を採り上げ、

(1)基本的自由と平等な権利、

(2) a.社会の最も恵まれない構成員に最大の効果をもたらす(最小不幸の基準:マクシミン公平基準:格差原理)

b.機会の公正な均等性

を設けた。

(2) a の格差原理で、もし、最も恵まれない構成員に利益をもたらすのであれば、格差があってもよいとした。例えば、医者が高い収入を許されるのは、その高収入によって能力がある人を医療に惹きつけることで、社会の恵まれない人が救われる場合に限られるとした。更に「階級間の差があまりに大きいと、民主的平等だけでなく相互の有利化という原理までが侵されてしまう」と考えている。

そして、松嶋敦茂は現代経済学史(、名古屋出版会、2005)でロールズが採り上げた、自然的自由の制度、②自由主義的平等の制度、③民主主義的平等の制度を紹介し、ロールズの正義の原理を採用した③民主主義的平等の制度について、

「この制度は正義の原理の第2項の格差原理に基づいている。従って、民族・人種・階級・性的な差異及び自然的資産の分配が富や所得の分配に与える影響を出来る限り除去することを目指したと言える。従って、ロールズの正義の原理に基づく所得分配についても、個人の能力がもたらす成果に対しても彼自身の所有権があることは認めない。近代社会では社会的分業による協業によって助けられて為されたものである以上、その成果は彼一人によって享受されるべきものではないと考えたからである。ロールズの思想はベントム等の功利主義よりもマルクスに接近していたと見ることも出来る。」と述べている。

#### 5. 功利主義と限界革命

## 5.1 限界革命 新古典派経済学

ゴッセンの物々交換モデルにおける限界効用の発見、そして2商品の交換が互いの限界効用が等しくなるまで続けられることを発見したときから、ジェボンズ、メンガー、ワルラス等の限界革命が始まった。当時のワルラスやパレート等の限界革命の主役たちは、ジェボンズを除いて功利主義者であることを認めなかった。しかし、供給者と消費者の限界効用が等しいと言うことを自分の理論の前提としていたので、数理的には何等かの意味で供給者、消費者の効用を集計したものを最大化することになる。

## 5.2 ゴッセンの交換法則

限界効用を基に市場での取引や経済活動をモデル化する限界革命が、先ず、ゴッセンの交換の法則によって始まった。ゴッセンは消費者と供給者との二者の取引では、取引量は社会的効用=集計的効用が、消費者の効用関数の限界効用（微分値）と供給者の限界効用が等しくなる点  $X_{opt}$  まで、商品の交換が続けられる。その時、二者の効用の和である集計的効用は最大(極大)  $Z_{opt}$  になるのである。もし、集計的効用が最大で無ければ、その時の両者の効用を  $z_1, z_2$  とすると、その和  $Z$  は  $Z = z_1 + z_2 < Z_{opt}$  である。従って、集計的効用が最大になる点  $X_{opt}$  にまで交換を進めれば、全体の効用は  $\Delta Z = Z_{opt} - Z$  だけ増える。増えた分を二者で折半すると、各々前の状態より、 $X_{opt}$  にかかわることにより、 $z_1^* = z_1 + \Delta Z$

$z_2^* = z_2 + \Delta Z$  に効用を増えることになる。従って、ゴッセンは自由競争が完全であれば、集計的効用が最大になる点  $X_{opt}$  まで交換を進めることになると考えている。

これは効用逓増など効用関数に凸性を仮定し、又、少し、言葉の言い換えは必要になるが、二者の効用関数を加えた目的関数の微分値=0の点を求めているので、総効用=集計的効用を最大化する点を求めたことになり、功利主義で疑いの余地がない。仮に、制約を加えてもラグランジュやオイラーの方程式で表わす数式そのものになるので、解くことが出来る。

元々の功利主義的思想、つまり、ゴッセン的な社会全体の効用=厚生(Welfare)を最大化しながら、それを恵まれない人々に分配するという思想を表明した人がいる。

「ピグーの「厚生経済学」は、所得配分の公正を問題としている。ピグーの第2命題は所得再配分はそれが経済全体のを減少させないかぎり、一般に経済的厚生を増大させるとしている。この命題は、収入の限界効用逓減の法則から導かれたもので、効用の基数性を前提した。所得再配分は貧者のより強い欲望を満たすことができるから、欲望充足の総計を増大させることは明らかであるとしている。」  
松嶋 2006

しかし、理解し難いことだが、個人主義的なりベラリスト達から猛烈な非難を受け、提案した厚生経済学まで変更された。

## 5.3 ワルラスの一般均衡論

ゴッセン等の理論を基に、社会全体の経済をモデル化したが、功利主義を否定し集計的効用が最大になるとは考えなかった。代わりに、限界効用関数を希少性を表す関数と考え、更に、等価交換の制約を追加した。等価交換とは、交換した財の価格(=希少性を表す関数の値：限界効用)と量の積の金額が、取引した二者の間で等しいと設定したのである。

ワルラスはゴッセンの主張するような集計的効用が最大になる点にまで交換取引が進む為には、共産主義のような国家による統制が必要と考え、拒否したのである。

しかし、取引する2者の限界効用が等しいと言う条件をおいた以上、実は等価交換と言う制約条件を満足させながら、集計的効用を最大化することになる。従って、ゴッセンの最適解に較べ、等価交換と言う制約条件が付く分少なくともワルラスの均衡解の集計的効用は小さくなる。又、互いに利益

が増えるので、ネゴシエーションの結果等でゴッセンの言うような集計的効用が最大になる点のほうに、取引が進む可能性は否定できない。

#### 5.4 パレート最適

ワルラスの後継者であるパレートは、経済的効用をオフレミテ(*ophelimit*)と社会的効用と別に扱っている。オフレミテとは経済学者の言う効用又は満足と同じ意味のパレートの造った造語である。「効用」と言う言葉をパレートは社会学の用語として用いた。

パレートは効用主義者のエッジワースの契約曲線の考え方を取り入れて、パレート最適点を考えた。契約曲線とは交換を行う二者の無差別曲線接点の軌跡で、二者の間の市場均衡は、両者が合理的に行動すればこの契約曲線上に落ち着く。契約曲線に到達するまでは、二者のうち少なくとも一方は、他方の効用を減少させることなく自己の効用を増加させることが出来るからである。

つまり、パレート最適点は、全ての人の満足を低めることなく、ある人の満足を増大させることが出来ない時、それを経済にとってのオフレミテの極大(パレート最適)と呼ぶ

しかし、パレートも後で気付いたのだが、問題はパレート最適点は契約曲線上の全ての点が、該当する。つまり、無限に存在する訳である。

「パレート最適の論理的同類項である「全員一致」と「自発的合意」を満たす均衡点は多数(無数)あり、かつそのいずれの点も選ばれるかについては当事者間に利害対立があるので、均衡は一義的に確定し得ない。」松嶋 2005

ゴッセンの集計的効用が契約曲線上で最大になる点は、あまり不自然ではない効用関数の凸性を想定すれば一つの最適点に決まる。つまり、効用関数が与えられたとすると最適点を計算して求める、つまりモデルが与えられると四足可能なのである。パレート最適点は理念として存在するだけである。

後年、パレートは自分の数学的な経済理論が実際に上手く行かなかった理由を理解する為に、社会学に関心を持つようになったと揶揄されている。事実、晩年のパレートはより非論理的な社会的な行動においても社会的効用は極大化することを主張している。

### 6. 効用は量れるかー効用の個人間比較

#### 6.1 効用の基数的計量

効用が数量的に可測なのかについては様々な検討が功利主義者やそれに反対するワルラス、ロビンズ他、多くの人によって既に行われている。それ等の結論は概して否定的である。一般論として言えば、快樂だけでなく人の幸福についても、そのまま数値で測れるとは思われない。

従って、もし一部でも代替指標として計量可能なものがあっても、それは限定したものであろう。例えば、GDPの代わりに様々な幸福度が提案されたり、又、吉川が提案するような地球生産性で定義される人間の享受する豊かさと地球への負担にしても、ジニー係数にしても限定された効果を持つおもとと考えられる。従って、それ等の代替指数は、全ての倫理の仲裁原理に成ることは無い。逆に、必要に応じて様々な異なった指数や指標が政策や意思決定の必要に応じて考えられるものであろう。

効用の個人間比較を近代科学観に基づいて明確に否定したのはロビンズと言われる。先ず、この背景について触れて、ついで、何故、効用を採り上げた経済学、限界効用を採り上げた限界革命による新古典経済学が事実上、利用されなくなったかについて考察しよう。

#### 6.2 ロビンズの個人間比較の否定

「後で(1930年代以降)現れて来た功利主義への最も大きな打撃はライオネル・ロビンズによる形を変えた功利主義であるピグーの厚生経済学への批判であろう。ロビンズは経済学は希少性を基に資源



の合理的配分を基礎と考えたので、経済学は価値判断—倫理から離れた科学でなければならなかった。ケインズもマーシャルやピグーのやり方は批判したが、失業率を如何に減らすかに腐心したように、経済学が倫理を持つべきである点では彼等のやり方は一致していたからである。しかし、ロビンズは新古典派の経済学に科学と言う目眩ませを加え、効用の基数的個人間の比較を否定し、経済学を序数的な効用を極大化する希少性のある代替手段を、合理的に配分する個人の行為を研究する者として定義したのである」松嶋 2005

ロビンズは限界革命以降、数学的に洗練されたワルラス、メンガー等の大陸の経済学の影響を受けていた。そして、効用の個人間比較—個人効用の計量—を科学的な根拠が無いと非難したのである。確かに、快樂や幸福を単位で量れるとは思われないが、お陰でピグーの厚生経済学は個人の福祉の観点から経済政策を評価する画期的な原理を持つのであったが無効となった。効用を個人間で比較したり、集計する基数的取り扱いが出来なくなったためである。

### 6.3 新古典派経済学と功利主義

ロビンズの示唆に従い行いジョン・ヒックス等当時、若手の経済学者達は個人の主観的な選好順序によって選択する序数的効用を用いて「新厚生経済学」を再構成した。パレート、ヒックス、カルドア等は個人が一連の代替物を選好する順序を選択できると仮定した。

そして、個人の効用の序数的な選好順序から、パレート最適点—全ての人の満足を低めること無く、ある人の満足を増大させることが出来ない点—を市場競争において見出される全ての点で無数にある。従って、パレート最適点は事実上 A.スミスの「見えざる手」と同じで、個人的かつ主観的な選択によって達成される。従って、政府は経済に介入すべきでないと言う結論になることが多い。

ワルラスやパレートの意図したのは、各々の取引者が自分の利益を個別に最大化しようとした時に、これは A.スミスの「見えざる手」と同じ想定であるが、均衡が成立すると考えた。

これ等の点が存在することは、ケネス・アロー、デブリューやナダール等によって証明された。しかし、存在することと、有効性があるかと言うのは別の話である。パレート最適点は、パレートが気付いているのだが、無数に存在する上に、これ等の複数の最適点の間で、当事者の利害が対立するために移行することは不可能である。

元々、一般の自由市場で取引する場合、誰でも自分が損をすると思うと取引を拒否する自由を持っている。従って、少なくとも主観的には自分の欲求が充足される、又は自分の効用=利益が増えないかぎり取引に応じない。従って、取引が成立した場合は、個人的かつ主観的には自分自身の効用はそれ以上は増加できない。相手も同じ条件の中で、自分の効用=利益が最大になるよう取引しようと試みるので、全ての自由市場での取引は常に主観的にはパレート最適を満足していると言える。従って、取引の仕方次第で、パレート最適は無限に異なった結果が得られるのである。

このように、パレート最適点は、自由市場での取引結果であると言う以上の意味はないし、それ以上の何も意味するものは出て来ないのである。A.スミスが発見していた「見えざる手」は、これかと思われるのだが、実はそれ以上のものを発見していたと小生は思うのである。

### 7. 現代の政治・経済の状況—リベラリズムの行方

世界第二次大戦後、マルクス主義、社会自由主義的なケインズ、新古典派の3者が入り混じって競合していたのだ。計画経済に対する市場自由経済の優位が明らかになり、共産圏は中国等一部を除いて破綻した。ケインズの政府の財政投資による景気回復政策は、産業の熟成とともに乗数効果が低減し投資効果が衰退し財政効果が無くなった。それで、個人主義に裏打ちされた新古典派経済学が注目されたが、それも効果が無いことが見極められると、完全に自由放任に任せる新自由主義(リバタリアニズム)に移行したのである。

現代のロールズ等の自由主義(リベラリズム)は自由の前提となるものを重視して社会的公正を重視し、新自由主義(リバタリアニズム)と相反する。例えばロールズは、貧困者や弱者がその境遇ゆえの必要な知識の欠如、あるいは当人の責めに帰さない能力の欠損などによって、結果として自由な選択肢を喪失する事を防ぐこと倫理的に社会に要請する。このためには、ピグーのように、政府による富の再分配や法的規制など一般社会への介入を肯定し、それにより実質的な平等を確保しなければならないだろう。

功利主義の主張する「最大多数の最大幸福」は字句通りに解釈すれば、政治的にも倫理的にも反論のしようが無い。今日では格差社会が進み、ポール・グルーグマンによれば米国では0.01%の金持ちが米国の富を殆ど独占している人が少数ではなく多数の人間が幸福であると言っている。

中世の圧政者に対する抵抗に始まった自由主義は個人の解放に傾いていた。しかし、圧制者の恣意的な束縛に対する権利の擁護を目的とする消極的な自由から、行動や施政への参加、意思決定を意味する積極的な自由が重なった。その時、経済は政府の役割に関し、2つの異なったアプローチが為された。

消極的な自由は当然としても政府に積極的な自由を預けて福祉の向上を図る社会自由主義と、消極的な自由のみを許し、政府に関与させず個人の行動の自由を認める新自由主義(リバタリアニズム)の2つである。しかし、前者はややもすれば、ケインズ以降、過剰な福祉に身動きとれなくなり、後者は自由な資本市場に奔走され、格差社会を産みだし、庶民は苦しむことになる。

そこで、政治倫理では、ロールズのリベラリズムに加えて、社会の絆を取り戻すサンデルのコミュニタリズムが期待されているが、生活者にとって最も重要な要素である経済についての解決策について具体的な提案がない。

## 8. 今後の方向

経済問題の抜本的解決に必要で重要なのは、以下のような解決方向への努力であると考えられる。しかし、これらの方向への努力を産み出すには、先ずは行動の選択の指針となり得る価値観、倫理についての合意を目指す意図が必要なのは言うまでも無い。世界が環境汚染されても自分だけがよければと言うのであれば、身も蓋も無い。小生の思う、今後の特に庶民にとって問題になる社会経済の問題解決の方向は以下の様のものである。

一つは、先ず、財の循環である。人間には、生物として外部からのエネルギー・物質の不断の供給が必要でありこれを確保する必要がある。人間の再生のための食糧や生活するための環境、および子育てするための教育機会等が用意されねばならない。

しかし、地球の有限性が明らかになってきた。資源の不足、環境の悪化、そして途上国を中心とする急激な人口増化である。このような地球的な制約も含め、様々な制約を効率的に解決するのを支援する仕組みは、個々の冒険的な活動家の創意工夫に頼るのみで、今迄の経済理論の枠組みの外である。地球的な負担を最小の負担で解決する、これを効率的に支援する仕組みが必要であろう。

二つは、K・マルクスが喝破したように、財の生産とそれが市場を介して消費者に受け入れられるまでの間には非常に大きな飛躍がある。財やサービスの供給のための投資とそれが消費者に受け入れられて貨幣に変わって戻ってくる間には、巨大な間隙が存在するのである。業を為すものはその冒険精神によって敢えて投資を行うのであるが、それが消費者に受け入れられるか否かは分からない。不確定性要因が無限にあり、彼の試みが成功するか失敗するかは事前に見通すことは中々難しい。今迄の経済理論では支援されたことは無いが、この飛躍を効率的に支援する仕組みが必要なのである。

三つ目は、関係性の充実である。ロールズに代表されるように、第二次大戦後の世界はコミュニテ

イが権威を喪い、個人の自由を標榜した。しかし、これはどうやら、一時的な現象であったのかも知れない。他人に無関心で、経済的効率だけを追求する時代の弊害が目立つようになった。若者の失業、孤独死。これを解決する為に、コミュニティの活性化を図るマイケル・サンデル等のコミュニタリアニズムが提唱されるようになって来た。

しかし、どのようなコミュニティをどのように創ればよいのか、試行錯誤が続くのではないか。これを支援する市場を越えた、そして効率的な経済システムが必要である。

従って、以上の(1)(2)(3)を組み合わせることによって始めて解決があるのではないかと考えている。つまり、人間の生活に必要な財・サービスの循環や、これを担保するための投資ーリスクを伴う為に飛躍を伴うー実現を効率的に支援する仕組みを準備する。そして、現在の市場による社会の歪みを克服するコミュニティの関係性を創造する必要がある。このための試行が要求される。

#### <参考文献>

- (1) 松嶋敦茂「功利主義は生き残れるか」勁草書房、2010
- (2) 児玉聡「功利と直感」勁草書房、2005
- (3) 八代尚宏「新自由主義の復権」中公新書、2011
- (4) 橋本努「経済倫理ーあなたは何主義？」講談社選書メティエ、2088
- (5) 永井均「倫理とは何か」ちくま学芸文庫、2011
- (6) 柄谷行人「倫理21」平凡社、2010
- (7) 伊藤邦武「経済学の哲学」中央新書、2011
- (8) 小林道憲「複雑系社会の倫理学」ミネルバ書房、2000
- (9) 佐伯啓思「アダム・スミスの誤算」PHP 新書、1999
- (10) 佐伯啓思「ケインズの予言」PHP 新書、1999

他

